生化学教室

内野豊生教授は二十年春、軍医備員として入隊中急死さる。

原爆当時は斎藤圭一助教授が教室を主宰し、矢野明助手と雇の奥平幾代、福田穂実子、久保マリ子、傭人の野間肇、黒川作市の諸氏が教室員であつた。

被爆時の状況

斎藤助教授は医専に講義中、矢野助手、奥平、福田、久保、野間、黒川の各氏は教室内で被爆死亡す。

故内野豊生教授略歴

従四位勲四等医学博士　生化学教授

明治三十四年三月十五日熊本県に生る
大正十四年三月東京帝国大学医学部卒業
大正十五年三月同学助手に任ぜられ医化学を研究す
昭和九年九月九州帝国大学助教授に任ぜらる
昭和十年八月東京帝国大学助教授に任ぜらる
昭和十三年六月長崎医科大学教授に任ぜらる
昭和十四年七月満洲国及び中華民国へ出張を命ぜらる
昭和二十年三月陞叙高等官二等
昭和二十年三月三日病のため卒す

主なる研究題目

蛋白質の化学構造に関する研究

故斎藤圭一助教授略歴

正七位附属医専教授兼生化学助教授

明治四十五年五月十一日宮崎県に生る
昭和十五年十月長崎医科大学卒業
同　年十二月同学助手に任ぜられ、生化学を専攻す
昭和十八年六月同学助教授に任ぜらる
昭和二十年七月長崎医科大学附属医学専門部教授兼長崎医科大学助教授に任ぜらる
昭和二十年八月九日大学に於て原子爆弾に遭い即死転に殉ず

主なる研究題目

Aminopeptidase に関する研究

死亡者の官職と氏名

官職	氏名
助教授	斎藤圭一
助手	矢野明
雇	奥平幾代
〃	福田穂実子
〃	久保マリ子
傭人	野間肇
〃	黒川作市

教室の思い出

伊藤　茂

早いもので長崎の地に原子爆弾が投下されて既に十年になり亦其の日が間近に迫つてきました。其の度毎に想い起されるのは、あの生々しい当時の災害の状況です。私は当時病院の婦人科に勤務していましたので、原爆当日の生化学の状況は知るすべもありませんが、あとで、かけつけた時あの懐しい教室の建物は跡形もなく、唯、真黒に焼けおち、吹き飛ばされた広野の中に見覚えのあるコンクリート建の図書室の一部を見て、この位置が生化学であつたかと思われるのみでした。そして僅かに昔の姿をとどめていたものは教室の前に有つた横穴防空壕と、図書室の地下室の中だけでした。建物の跡には、それらしい建物の台石が点々としてある外、歩くのにさえ困難な程、物凄い破壊のあとでした。

想えば昭和十七年から十九年八月迄、此の建物で恩師内野教授のもと、斎藤助教授、天野助手等と共に学んできましたが、其の間段々状勢が厳しくなり、燈火管制の夜、暗幕をはりめぐらした実験室で教室員も次々と減つてからはとう〳〵三日に一回宛当直したこと等未だに忘れることができません。

其の後教授は二十年春、軍医予備員として久留米一四八部隊に入隊中急死され、後任教授の欠員中斎藤助教授が教室を主宰され、研究に学生の実習に矢野助手と二人で励まれたようでした。

其の二人も既に教室と運命を共にされ今は在りません。

八月一日に長崎に空襲があり、病院もねらわれて、直撃弾が数発落ちました。其の折私も負傷しましたが、斎藤助教授が来られて基礎教室の方は安全でしたよ、我々は防空壕にも入らず敵機の方向を見ていました。今後も基礎教室の方はねらわれるはずはない安全ですよと言つておられましたが其の数日後に運命の原爆でした。

当時生化学にも警報中は学生が数名配属され各々其の配置任務を与えられていましたが、小使にいたるまで全部亡くなられたと思われます。

十年後の今日更に当時を追想し、原爆の犠牲になられた皆様の御めいふくを祈る次第であります。

（佐世保港外崎戸町　三菱鑛業所病院勤務）

当時を憶う

増田　綾子

十年前の八月私は矢野の妻でした。

想い出して見れば戦時非常体制の為め繰り上げ卒業で、生化学教室へ這入つたばかりの主人の処へ嫁いで来た時は、教室は内野教授と斎藤圭一助教授、斎藤健夫先生、伊藤茂先生四人丈けで、現在に較らべると淋しい次第でした。

十九年に斎藤達夫先生の論文が通り、教室を去られ、やがて伊藤茂先生も婦人科へ入局され、二十年に内野教授は予備医員として入隊中急病でお亡くなりになりました。内野先生は非常に勉強家で色々御仕事の成果を残されて居られました相です。先生の御家族は戦争もはげしいし、

生活も苦しいからと、大学葬が済み、一ト月ばかりで東京へ引揚げられました。斎藤圭一先生は伊良林にお住いでしたけれど、小さいお子様がおできになつてから、大学の防空警備や自宅と、大変になるからと、奥様お子さん二人を故郷へ帰され御自身は教室にお住いでした。

其の頃は斎藤助教授と、矢野と二人で隔日の当直でした。又夜毎の空襲で、家に帰宅しても警報が鳴れば夜中でも起きて出かけ警備にあたる始末でした。しかし心配する程空襲される事はありませんでしたが、一度婦人科に直撃弾を受けて死亡者が出ました。其の日は心配していましたが元気よく帰宅しましたので空襲と云うことをノンビリ考えて居ました。

九日の朝、粗末な朝食の折、角尾先生が広島で見てこられた新型爆弾の話をして、いろ〳〵大学も疎開する事等話して九時頃、家を出ました。私はびんに玄米を入れステツキで、精米してる時、パツとあの忌々しい奴が落ちたのです。十一時頃だから、すでに大学に着いていた筈です。防空設備は自宅よりいゝからと私は心配もして居ませんでした。だが、其の晩かえらないので、翌朝あわてゝ尋ねに出かけました。長崎駅辺りより地獄の様にまだ燃えすぶつてる処を心ばかり急ぎ、暑い太陽の上り始めた頃出かけたのに着いたのは午後一時近くなつていました。全く何とも今一度想い出したくもありません。

空襲の為め食事の用意も時間通り出来ないし、又当直で泊る事が多かつたので、ほとんど毎日の様に弁当を持つて大学へ行つたものでした。

私は第一実験室で仕事をしてる時もあれば、実験の材料、薬の仕入れに馳け廻る事もありました。蛋白の為めの牛肉を、闇の屠殺場へ買いに行く事が度々ありました。少しでも余れば食事に使えると思うと、うれしくなつたものでした。かえり途は大学の庭に小使さんにつくつてもらつた南瓜や馬鈴薯を負つて帰宅するのです。いよ〳〵戦局はきびしくなる一方で、アチラ、コチラ疎開されてる話に、家でも姑を田舎へやり、ホツトしたばかりでした。荷物も三個、生化学教室の地下室へ入れて居りました。

基礎教室はほとんどが木造洋館でしたので、すつかり灰となつて土台石さへ見当がつかず教室や主人の居た部屋の辺りを探し出した時はボンヤリなり、気がぬけてフラ〳〵と坐りこんで、しばらく立てずに「こわい、如何しよう」と一瞬変な気になつて、腰がぬけたのではないかしらんと思いました。後でようやく気を取り直し、一度帰宅して家人について来て貰い、それから、あちらこちらと探し廻りました。

教室に関係のある方の家庭へも尋ねて行きましたけど、誰一人生き残つた方もありませんので、其の時の様子がサツパリわかりません。只当日逢つた学生さんの話に依れば、丁度斎藤助教授は講義中で光りの一瞬直ぐ教壇に倒れて居られた相です。

教室入口が小さい小使室でした。其処へ、まだ半分程焼け残つた死体が二体ありました。何如にも、その一つの様に想えるがまた慾目で、何処かに負傷でもして生きてる様な気がして随分探し廻りましたが、二十日程のち、伊藤茂先生より指摘され、やつとお骨を拾いに行きました。内野先生の後、頼尊先生におきまりになつたばかりで、まだ当地へは赴任して居られませんでした。矢野も斎藤先生を手つだつて医専の講義に出て居りましたから、随分勉強と実験に忙かしかつた様でした。実家の父が拾つてくれた主人の骨が骨つぼにコト〳〵音を立て悲しみの涙が一度

に、せきを切つて流れ出しました。遺族の方々のみ知る突然の悲哀ではないかと思います。後日、図書館の地下室へ荷物をとりに行きました折薬品や、非常袋や、メチャ〳〵でしたので、わからなくなりましたが、故内野先生の奥様より非常袋に先生の数々の研究の結果が納めてあつたと聞き、「貴女も近くに居て保管すべきだつたのに」と、言われ、全く気が付かずに済まない事をしたと、今だに後悔しています。

アノ日から十年目の夏です。私はお蔭様で、又大学に勤めさせて頂いてますので、毎日毎日を多忙の中に暮して居ります。時折斎藤先生の二人の御子様、奥様は、又、教室に居られた方々の御家族様はいかゞお過しだろうかと思つております。二度とこうしたおそろしい事がありません様にあわせて、故人の冥福を祈つて居ります。

（附属病院外来患者係勤務）

細菌学教室

当時の教室員は内藤達男教授の下に、三谷秀夫助手、葉国慶、山田英子両副手が研究に従事し、尚其の他に雇の原ルイ子、深井光子、教室補助の井上公人、定夫の渡辺直道、傭人として糸柳源太郎の諸氏が勤務して居た。

被爆時の状況

内藤教授は三谷助手、山田副手外二名と共に教室で被爆され、内藤教授、三谷助手は爆死、山田副手は片淵の下宿に辿り着いて死亡。他の教室員も教室で被爆し、深井、渡辺の両氏は死亡す。

故内藤達男教授略歴

正四位勲四等医学博士　細菌学教授

明治三十年九月一日徳島県に生る
大正十二年六月京都帝国大学医学部卒業
同　十五年一月同大学助手に任ぜられ細菌学を専攻す
昭和五年四月同大学助教授に任ぜらる
同　七年六月長崎医科大学教授に任ぜらる
同　十年三月細菌学研究のため欧米に留学、翌十一年十一月帰朝す
昭和十七年七月満洲国及中華民国に出張を命ぜらる
昭和十八年一月陞叙高等官一等
昭和二十年八月九日大学内に於て原子爆弾に遭い転に殉ず